

文化の継承



秋の峰入りの様子

その十一 出羽三山の

修験道と宿坊

今年も、この鶴岡のまちに法螺貝の音が響き、羽黒山の山伏の方をお見掛けする季節になりました。言つまでもなく、羽黒山など出羽三山は、ここ庄内・鶴岡にとってはもとより、全国的にも極めて貴重な文化資源で、私たち市民にとっては誇りにも思つ身近な資源でもあります。

その出羽三山ですが、古来「西の熊野詣で 東の奥参り」と並び称され、長い歴史を重ねてきた羽黒派修験道の地です。この間、数々の厳しい事案を関係者が真剣に取り組んで乗り越え、とくに明治時代には、神仏分離令、修験道廃止令が施行されたのですが、そんな中でも、ここには神社・寺院と門前町手向地区の修験者によって、修験道とその伝統が引き継がれています。

今回は、出羽三山神社権宮司の宮野直生さん、正善院住職の島津慈道さん、羽黒宿坊組合副組合長の星野三男さんに、山形大学農学部教授の岩鼻通明さんの司会で、出羽三山の修験道と宿坊の歴史、その伝統の継承への思いなどについて語っていただきました。

今回は、座談会に先立って出演者に取材をした部分も、一緒に掲載していますので、予めご了承ください。

三本脚の鳥に 導かれ



岩鼻 最初に、蜂子皇子による出羽三山開山について、宮野さんからお聞かせいただきたい。
宮野 出羽三山は、推古元年（五九三）に、第三十二代崇峻天皇の第一皇子の蜂子皇子によって開かれたお山です。当時の日本は、蘇我氏と物部氏といった

豪族が支配し、仏教が入って数十年という時代です。今までどおり神の国として国づくりをしていこうという勢力と、新しく入ってきた仏教を中心とした国づくりを目指す崇仏派、その二つの勢力が競合していたわけです。その中で、旧来の国づくりで歩いていこうという崇峻天皇は、崇仏派の蘇我馬子によって暗殺されたと言われています。



岩鼻通明氏
山形大学農学部教授



星野三男氏
羽黒宿坊組合副組合長



島津慈道氏
正善院住職



宮野直生氏
出羽三山神社権宮司

皇子として宮廷に留まるとその身が危ないと察した蜂子皇子は、京都の丹後の国から日本海を北上し、鶴岡の八乙女浜（現在の由良地区）にたどり着き、そこで、三本脚の烏に導かれて羽黒山に参り、その後月山、湯殿山を開いたという出羽三山開山の故事が伝わっております。

山伏の起源



島津 日本の信仰について、遠い古代に遡り、その原点は何であつたかと申しますと、まず人間の力が及ばない畏敬のものを神として崇めた。その神は山、また海に向こうにおられる。だから山や海に向つて神を崇めることから始まつたわけです。そうして行われていたところに、外来の仏教などが入ってきて、今度は逆に、自分たちが崇め、他界としてきた山の中に入ることにになり、そこで、修行ということが始まるわけです。それでその山岳修行が盛んになってくるのが、空海や最澄のころです。結局、仏道修行する人たちが、修験者ということになってくるわけです。そして、厳しい山岳修行を行うことによって、さまざまな靈験・験を身につけ、相手の望みを叶えてやれる力を

持つ修験者が生まれきます。その修験者は、山に寝起きしながら、野に寝起きしながら修行をします。そこで、山に伏す、野に伏す、というので、「山伏」または、「山臥」という言葉が出てくる。

山における修行の意義は、自然における生命のエネルギーをいただくことなので、そこに、自然と自分との関係についての世界観が出てきます。

そして、修験道では暦が重要です。春夏秋冬のけじめ、そして、我々の年齢の捉え方、例えば厄年や還暦、七五三、初七日や四十九日など、皆さんの生活内容に密接に入ってくる。これが、修験道の広まる大きな力になってくるわけです。

羽黒派修験道



島津 このように、羽黒派修験道も、日本古来の自然崇拜・山岳信仰と仏教などの考え方によつてできあがつたのです。そこには、「生」と「死」の問題が常に絡んできます。

例えば、「秋の峰」は、お母さんの胎内の修行と言われます。お腹に入っている二百七十五日、通称「十月十日」。お母さんの腹の中に入って産まれ出るまでが

修行の中にも出てくるんです。我々の「生」はすでに胎内から始まつているのです。

この秋の峰の究極の目的は、自分自身が仏様、生き仏になるということなんです。そのため、六根清淨します。我々は、目・耳・鼻・舌・体・心という六根によつて悩まされるわけです。例えば「あの人はこう言つたっけ」「あの人はこう言つたっけ」と言つたり聞いたりして、自分の心が歪むと。それを抜つて清めていく、これを六根清淨といえます。

自分の感情的なものにとらわれないで、自然的なものとして生命を捉えながら、結局、自分の「我」というものをそこで完全に消してしまつたわけです。そして、「みんなのためにどうあるべきか」という方向でもつて、すべてがなされるのです。

最近、門戸を広げているので、秋の峰には、一般の方も多く参加するようになりました。一番多いのは管理職ですね。それから、お医者さんやスポーツ選手、オリンピックの選手も来たんですよ。精神的修行というのかな。悩みを抱えることがある人たちが多いんです。また、ずっと続けて参加する外国の方もいますね。

解説

秋の峰…山伏にとって最も重要な行。手向地区の妻帯修験(妻帯山伏)をはじめ、全国に散在する羽黒派の山伏たちが、位の昇進をかけて激しい修行を行う。

松聖…手向地区の長老の山伏から、「位上(いじょう)」と「先途(せんど)」と呼ばれる二人の松聖が選ばれる。松聖は「冬の峰」という百日間の修行を行い、その間、国土安穩・五穀豊穡を祈り続ける。

冬の峰…松聖による百日間の行。その修行の最終日の大晦日には松例祭が行われ、二人の松聖が百日間の行の成果を競い合う。この松例祭では、手向地区の若者と共に大松明引き(おおたいまつひき)や綱さばき等が行われ、松聖としての行が終わる。

清僧修験(清僧山伏)…羽黒山の山内の寺院の僧。妻を持たない(妻帯しない)ので、江戸時代までは寺院は弟子に引き継がれていった。

妻帯修験(妻帯山伏)…山麓の手向地区に住み、妻を持った山伏。手向の宿坊の先祖も妻帯山伏であった。

末派修験(末派山伏)…全国各地にいる羽黒派の山伏。

講…参詣する人たちが組織する団体のこと。

当屋…神社の祭りなどで、神事や行事の主宰者となる家。世襲や当番制で行う。

神仏分離…慶応四年(一八六八)の神仏分離令によって行われた、神道と仏教の分離政策。

廃仏毀釈…神仏分離令に伴って起こった、寺院や仏具、経文などの破壊行動。

中興の祖 天宥別当

岩鼻 江戸時代に、今に続く羽黒派修験道の基礎を築いた、中興の祖といわれる天宥別当についてお話をいただきたい。

宮野 天宥が別当になった江戸初期の出羽三山は、戦国動乱の戦場となって、衰微しかけていました。そうしてお山のたて直しのため、天宥別当は、幕府の黒衣の宰相と言われた天海僧正に弟子入りし、この後盾のもと、様々な改革に取り組み、三山の隆盛を図ろうとしたのだらうと思います。宗教的な行のあり方、組織見直しを正していきま。また、石段を築いたり杉の木を植えたり山内を整備し、庶民のために堰を築いて田畑を潤したりもしました。

しかし、世の中というのは、あまり強引にやりすぎると、その反動、反発が出てくるわけで、山内衆徒の中で、これに賛成する人と反対する人の二つの勢力に分かれたのでしよう。改革半ばで政治犯として幕府に訴えられ、裁判の末、伊豆七島の新島に流されてしまいました。しかし、天宥別当は、罪人としていても別格だったのでしよう。代官に庇護されて、活動は自由

だったようです。書道を教えたり絵画を教えたり、陶芸を教えたりと、島民と親しくし、慕われたそうです。

今でも天宥別当のお墓は、新島の島民によって守られており、羽黒の関係者による墓参講がきっかけで、旧羽黒町と東京都新島村は友好盟約を結びました。今では、羽黒の駅伝大会に新島の方が参加したり、子供たちもスキーに来たりと、信仰面だけでなく交流をもたらししています。このように、天宥別当の功績は今でも引き継がれているわけです。

岩鼻 戦国時代というのは、どちらかと言うと地方分権の時代だったわけですから、それが江戸時代になって中央集権的な国家になった。そして、修験道の世界も本山派(天台宗系)と当山派(真言宗系)という、中央の二大勢力しか認められなくなりました。いわば羽黒修験はそこに従属するようになった。それを天宥別当が地方の羽黒派修験道の本山としての地位を取り戻させた。それがなければ、今日の羽黒派修験道というものもなかったわけですから、そういった功績は、非常に大きいということでしょうね。

出羽三山講

岩鼻 民衆に信仰を広めていく役割を担われたのが、宿坊の先祖、妻帯山伏でした。

星野 はじめは、各地の清僧山伏と、またその弟子・末派山伏が布教活動をし、参拝の先達をして来ておったそうです。

その後、江戸時代の初期ころから、羽黒山の妻帯山伏だった私共・宿坊の先祖たちによって受け継がれたようです。千葉県には、私の先祖が届けた三百五十年前の羽黒山本坊の御札があるんです。そのころにはすでに私の先祖が出かけていたので、そうして、各地に信仰者による講を、奥三山講、奥州講という名前で作って、出羽三山に参拝したので。

各地を回る妻帯山伏は、ただ布教してただけでなく、例えば、貧しい地域に田畑の開墾や養蚕を広めたりと、地方の生活の向上といった面でも手助けしてきたという話が今に伝えられております。このように生活に溶け込んだからこそ、羽黒の修験道、また講も広まっていたのだと思われま。また、妻帯山伏のなかには年をとって、そこで寿命を迎えた方もあったそ



(左上) 御田植祭り... 5月8日
 (左下) 花祭り... 7月15日
 (中央) 八朔祭... 8月31日
 (下) 松例祭... 12月31日



れだけでなく、冬の峰では松の勧進かんじんといって、松例祭のために庄内三郡 何十万の人に「寄進をいただきにあげるわけです。そうして、大勢の人のお世話になって、冬の峰の百日間の行ができるのです。この行の間は、朝夕に、天下泰平・国土の安穩五穀豊穰じゅうじょう、庄内三郡の人たちの幸せを祈ります。

また、祭りを手伝ってくれる若い人たちが、また大変なんです。この若い人たちがいなければ、松例祭は成り立たないので

の門前町から山の上まで清掃奉仕をする慣わしがあるんです。それは、夏に全国から参る来山者に、気持ちよくこ来山いただけるかとの思いからです。大人数の人が「先祖がそうやってつないできたものを俺たちもやっていかなきゃだめだ」と思っている、そういう風土なんですよ。

今、NPOを作って、地域の若い人たちがいろいろと活動しています。

岩鼻 月山旧登山道の整備とかされていますよね。

宮野 そういう意識が起きたということとは、私はすばらしいことだと思えます。ここに生を受けて育った人たちは、いかにして守っていくか継承していくかと。私たちに課せられた使命だろつと思えます。

祭りの当屋制度あつやせいどや、松聖もそうなんですけれども、一生一代の誇りなんです。子供たちには、後の世まで、「うちのじいさんは、当屋を務めて、こうやって家を継いでくれたんだ」と。

岩鼻 誇りになりますよね。

宮野 それが教育でしょう。だれが教えるかと言つと、やはり家族です。そういう姿を見れば、私は自然に備わってくるんだろつと思えます。

自然の恵みに感謝する

宮野 市街地の方からは、雪に覆われた月山の全景が見えますね。山に冬季間に降つた雪が森林に蓄えられ、そうして春になると田畑に水が行き渡る。森林がなければ海に水が全部流れていって、洪水になるわけです。この自然の恵みに私たちは感謝する気持を持ちたい。

出羽三山には、自然を崇め、感謝する祭りがあります。五月八日の御田植祭りは、田を耕して種をまく一連の田舞たまいです。七月十五日の花祭りは、稲の花が咲き実るように。八月三十一日の八朔祭はつしやくは、病虫害・台風から守ってくれるよう。そして十一月二十三日の新嘗祭にいなめを迎え、五穀豊穰に感謝します。一年をとおして地域と結びついた文化がずつと続いているのです。

山に降つた雨は、田畑を潤し、野菜や果物を育て、実りの秋を迎えます。そうして、私たちが生かされている。

島津 日本における、精神的支柱しちゅうというのかな。今まで、明治になって近代思想を取り入れて、廃仏毀釈はいぶつぎせき、神仏分離しんぶつぶんりをやつて、それは近代化には必要だったかもしれないけれども、今日では



松例祭

無思想、無哲学とも言える状況になってしまった。西洋には、人間だけが理性をもっているという捉え方、あくまでも人間中心的な考え方があります。しかし、修験道は自然を中心にしたものの考え方です。生きているのではなく、生かされているというものの捉え方です。この修験道の考え方、命の捉え方は、今後の二十一世紀、二十二世紀に向かつて、大きなものの考え方、哲学として、必要とされてくるのではないのでしょうか。

丑歳御縁年



岩鼻 出羽三山は、来年が丑歳御縁年ということですが。

宮野 観光業界などからは「丑年で何が来るの？」と聞かれることもあるんです。

丑歳御縁年に参拝すると、十二年分の御利益があるとされています。昔は、ここまでの道のりは大変なものでして、経済的にも大変だったので代参なんです。代表してお参りに来ていたわけです。だから、十二年分の御利益を得るために、十二年に一度、丑年にお参りに来る。だから、「何があるんだ」と言えば、御利益でしようが、私はこの三山信仰の原点を皆さんに分って

いただく年だと思っています。

星野 栃木県には、「丑年を三回お参りしないと一人前でない」という地方もありますの。

昔は何日もかけて歩いてきたわけですから、本人も丈夫でなければならぬし、家族・親戚みんなが健康でなければ、何か不幸があれば来られないでしょう。すると、来年は丑年となりますと、みんなが生活を大切に、事故のないような暮らしの仕方をみんな心がけたわけです。

ですから、「十二年に一度の御縁年にお参りしましょう」「丑年の御縁年というものはこうなんだ」と知らない人たちに広めるきっかけになると思うんです。

世界遺産登録へ 向けて



岩鼻 そういう意味では、出羽三山なり、最上川を広く知っていただくことと県でも世界遺産登録を目指してきたわけです。

今年九月の文化庁の発表では残念ながら暫定リストには入らなかったわけですが、それに次ぐランクに位置付けられました。今後、河川の利用と信仰との結びつきの観点から、最上川と出羽三山、鳥海山との関係について、さらなる検証を行うことが課題となっています。また今、

国土交通省所管の歴史的な街なみを守る制度もできて、これまでの文化財保存の法律では難しかったことも可能になったように、景観保存的なこともできると思われ、そうした点からの努力の積み重ねが、世界遺産登録につながる道でしょう。当然、文化財保存に対する県民や国民の関心も増していきます。

それで、国や県、鶴岡市とで、よりよい保存の方法を考えていただき、地元の方々の意見も反映するような方たちで、貴重な文化財保存ができるようにしていただきたいものと思います。

宮野 出羽三山の貴重な建物等の文化財は、もちろん後世に伝えていくべきです。また、すべての地域にそれぞれ伝統文化があります。地域と共にある松例祭等の行事も、残していかなければと思います。そういう伝統行事は、宗教的な行事というだけでなく、地域の文化です。から、**岩鼻** そうですね、文化財指定には有形だけでなく、無形文化財もありますし。そうすると、県内の民俗学会と文化庁との連携も必要だろうと思います。

本日は貴重なお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。